様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３３９０８
研究種目：若手研究(A)
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｈ０５３９０

研究課題名（和文）ハイエク思想の大衆化に関する研究：新自由主義はどのように「ネオリベ」となったか

研究課題名（英文）Study on the diffusion of Hayekian thought: how did neo-liberalism transform to ''neo-libe''?

研究代表者
吉野　裕介（Yoshino, Yusuke）

中京大学・経済学部・准教授

研究者番号：００６１１３０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は，思想の大衆化の過程，つまり思想家の言説が人びとに普及し受容される際の歴史的経過を解明することであった。より詳しくは，「新自由主義」の象徴とされてきた思想家の主張と，昨今いわゆる「ネオリベ」として人びとに理解されている思想との間に「ずれ」があるという認識をもとに，それが生じた歴史的背景を描き出すことである。
　この課題に取り組むため，二十世紀に活躍した経済学者であるフリードリッヒ・ハイエクの思想を参照点に，1.人物，2.組織，3.地域という三つの観点から，順にこの問題を考察し，新自由主義の普及過程について，多角的な視野から検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的意義および社会的意義は，アーカイブワークに基づいた従来の経済思想史の研究手法を基礎としつつ，思想の大衆化という新しい観点から経済思想の発展を解明するというアプローチを開拓したことにある。昨今，国内外において，経済思想の普及をテーマに活動する研究グループが存在し，研究成果を世に出している。本研究では，これらにキャッチアップすべく，経済思想研究に新しい研究アプローチを取り入れ，成果を残すことを目指した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the process of popularization of thought, that is, the historical process when the thinker's discourse was disseminated and accepted by people. More specifically, there is a gap between the thinkers who have been regarded as a symbol of "neo liberalism" and the ideas that people now understand as so-called "Neo-libe (in Japanese)". In order to address this issue, we considered this problem in order from three viewpoints: 1. person, 2. Organization, 3. Area. We examined the diffusion process of neoliberalism from a multilateral perspective with reference to the ideas of Friedrich Hayek.

研究分野：経済思想

キーワード：ハイエク　新自由主義　ネオリベ　フリードマン　オーストリア学派　シカゴ学派

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)学術的背景　【自由の意味の混迷という思想状況】

二十世紀の終わりに東西の冷戦構造が崩壊して以降，新しい社会像の構想は，社会科学者の大きな関心のひとつであった。そこで新自由主義の思想は，市場の機能に価値を認める思想として有益な知見を提供したが，近年では格差や金融危機の元凶として，「ネオリベ」と揶揄されることも多い（服部 2013; 中山 2013）。

新自由主義の思想的源流として挙げられるのはハイエクやフリードマンだが，かれらの主張は時として過度に単純化されることがある。とりわけハイエクが主張する「新自由主義」の思想と一般の人びとの「ネオリベ」理解には，大きな「ずれ」がある（吉野 2014）。

こうした現在の思想状況において，「新自由主義」だけでなく「自由主義」や「リベラリズム」といった用語は，専門家や一般の人びとの間で，きわめて多様な意味で使われている。現代における自由をめぐる議論を整理するためには，「新自由主義思想の大衆化」，より詳しくは，人口に膾炙する過程で「新自由主義」が「ネオリベ」へと変容した経緯の考察が必要であった。

(2)国内外の研究動向　【今世紀以降のハイエクや自由主義に関する研究の進展】

自由主義経済思想の歴史研究は，近年つとに進展を見せている。とりわけハイエクの言説に関する研究は，資料の整備が進んだことでさかんである。以下に，関連する先行研究を挙げる。

Caldwell(2003)は，ハイエクの稀少な資料を積極的に用いて，かれの自由主義経済思想を二十世紀の知性史に位置付ける優れた研究を行った。Ebenstein(2001; 2012)は，ハイエクとフリードマンの差異を，特に後者からの視点で比較検討した。同様に江頭(2012)は，両者の採用した経済学方法論的差異を，シカゴ学派との距離感から考察した。

Hartwell(1995)および Mirowski & Plehwe(2009)は，二十世紀の自由主義の大衆化に大きな役割を果たした組織「モンペルラン・ソサイエティ」の発展過程に注目し，自由主義者の知的ネットワークが戦後の西側諸国の経済政策に与えた影響を概括した。また Cockett(1995)は，経済思想の普及過程におけるシンクタンクの役割を描きつつ，モンペルラン・ソサイエティの組織化が，西側諸国の自由主義思想家の交流と知識の集約に貢献したと論じた。

(3)着想に至った経緯　【自由をめぐる議論の整理の必要性】

上述したように，ハイエクを中心とした自由主義経済思想の研究は，多くの蓄積がある。しかしながら先行研究では，本人が論じた「新自由主義」と大衆化した「ネオリベ」の間の使われ方の「ずれ」に注目した研究は，あまり見られない。このような思想研究の状況下では，リベラルやリベラリズムも含めた自由に関する議論は，困難なままであろう。それゆえ研究代表者は，自由に関連する概念の用法を整理するため，新自由主義の「大衆化」に関する研究という着想を得るに至った。

２．研究の目的

これまでの研究成果の発展として【思想の大衆化への関心とハイエク思想の現代的な再考】

これまでに研究代表者は，ハイエク思想に関する歴史研究と同時に，現代的な関心からの研究を行ってきた。前者の成果である論文では，ハイエクの著作のヒットを通じて，イギリス由来の自由主義が戦後のアメリカで保守思想に変容し，かれの意図とは反対に，リベラル思想の大衆化を促す契機となったことを論じた（吉野 2013）。後者の成果である著書では，かれの思想体系が知識や進化を軸にした新しい社会理論として再考できる可能性を示した（吉野 2014）。同書は専門分野である経済学史学会以外の学会でも取り上げられ，ハイエク思想の現代的な再考という観点について，その意義を評価された（西田 2014）。

そこで次の段階として，これまでの研究をさらに拡張・発展させるために，自由主義思想の普及の問題に取り組むことや，ハイエク思想を現代的な文脈に置いた研究を行うという見通しを立てた。

３．研究の方法

したがって本研究は，現在生じている思想家の言説と人びとへの受け入れられ方との「ずれ」を，「新自由主義の大衆化の過程」の問題として設定した。そしてそれを追求する具体的な方法として，以下の観点を導入し，一年に一つのテーマを考察し，それを四年間かけて全体の計画を段階的に遂行した。その具体的なテーマとして，1.人物，2.組織，3.地域の三つを設定した。最終年度においては，これらをまとめた 4.総合的な考察を成果に結実させることを目指した。

さらに詳しく言えば，ハイエクの経済思想研究を基軸に置きつつ，思想家本来の「新自由主義」と一般の人びとに受け入れられた「ネオリベ」との「ずれ」，専門家と大衆を結ぶ役割を担う学術的な「組織」が思想潮流の形成に与えた影響，さらにこうした思想が現実の「地域」に適用される時に起きた意味の変容について論じるというのが，本研究で目指した計画であった。

以下では，四年間の研究を各段階ごとに詳述する。

平成 27 年度【人物】

＜ハイエクとフリードマンの「新自由主義」経済思想に関する比較考察＞

計画の一年目は「人物」に焦点を当て，ハイエクとフリードマンの自由主義経済思想を比較

検討した。具体的には，(1)かれらの言説がいかなる意味で「新しい」自由主義かという問題と，(2)かれらの主張と，実際に「新自由主義」的としてみなされ実行された政策の内容とが，どの程度対応するのかという問題を考察したのであった。

通常新自由主義とは，「小さな政府」を目指す経済・政治思想を指す。この思想に基づいた経済政策は，実際に米国のレーガンや英国のサッチャーによって推進された。しかし，これらの背後にある「新自由主義」とハイエクの思想は，必ずしも同じではない（吉野 2013; 2014）。そこで，ハイエクとフリードマンの自由主義の差異を論じ，さらにかれらの「新自由主義」と実行された政策が持つ思想との差異を整理した。

平成 28 年度【組織】

＜ハイエク思想とモンペルラン・ソサイエティによって普及した「新自由主義」との比較研究＞

二年目は「**組織**」の観点から，二十世紀に自由主義者の会合として西側諸国に影響力を持ったモンペルラン・ソサイエティに焦点を当て，ハイエク思想との異同を解明することを目指した。

1930 年代には，リュストウやレプケら，オルド自由主義者を中心に，「新しい」自由主義の構想が議論されていた。ハイエクは，かれらとの交流を契機に同会の設立を決めたという経緯がある(Mirowski & Plehwe 2009; 吉野 2014)。さらに，新自由主義の大衆化に関連して，モンペルラン・ソサイエティという組織の持った影響力をハイエク思想との異同から論じることが，ここで目指された成果であった。

平成 29 年度【地域】

＜ハイエク思想とピノチェト政権の「新自由主義」的経済政策との影響関係の考察＞

三年目は「**地域**」に着目し，1970 年代に新自由主義的な経済政策によって実際に経済成長を遂げたチリのピノチェト政権の経済思想に焦点を当て，ハイエク思想との異同を抽出した。それにより，思想が実際に地域へ適用される際の「大衆化」の過程を闡明する準備とした。

ピノチェト政権下のチリは，国営企業の民営化や外資の導入などの政策を実行し，一定期間経済成長を果たした。そこで政策顧問として影響力を持ったのが，シカゴ大学のフリードマンに学び，帰国してチリ・カトリック大学で教鞭を執った「シカゴ・ボーイズ」と呼ばれる経済学者たちである。一方で，こうした新自由主義的政策は，ピノチェトが民主主義を否定し，軍事政権を敷いたことで可能になったという側面も持つことが問題として挙げられる。ただし，ハイエクのピノチェト評価に関する専門的な研究は，これまでにほとんど見られないため，これを考察することを目指した。

平成 30 年度【総合的考察】　＜新自由主義経済思想の大衆化過程に関する研究の達成へ＞

四年目には，「**総合的考察**」としてこれまでの成果をまとめ，書籍や論文として公表を目指した。それまでの三年間の活動により，人物・組織・地域の観点からみて，新自由主義という混乱した用語の成立過程について考察した。そして，各論文で得られた成果を再構成し，「思想の大衆化の過程」に関するまとまった成果として専門的な著作へ結実させることを目指している。また，それぞれ執筆した論文については，今後海外学術雑誌へ投稿する予定である。

４．研究成果

本研究課題の主目的は，思想家本人の言説と人びとへの受け入れられ方との「ずれ」を，「新自由主義の大衆化の過程」の観点から考察することにある。実際には【人物→組織→地域→総合的考察】の四段階の順で考察した。

一年目にあたる平成 27 年度は人物に着目し，ハイエクとフリードマンの自由主義経済思想を比較した。より詳しくは，ハイエクの経済思想研究を基軸に置き，思想家本来の「新自由主義」と一般の人びとに受け入れられた「ネオリベ」との「ずれ」，専門家と大衆を結ぶ役割を担う学術的な「組織」が思想潮流の形成に与えた影響，さらにこうした思想が現実の「地域」に適用される時に起きた意味の変容について問題を認識するに至った。

専門分野の学会誌『経済学史研究』に執筆した Angus Burgin, The Great Persuasion: Reinventing Free Markets since the Depression, Harvard University Press, 2012 の書評を書き上げるなかで明らかになったことは，自由主義経済思想が，常に思想的・思弁的な活動と現実社会の緊張関係のなかで発展や衰退を繰り返してきたという事実である。したがって，自由主義経済思想そのものと人口に膾炙した「ネオリベ」との差異を認めるとき，そのズレの原因の解明のため次に必要なのは，思想が現実に与えた影響力の考察であることがわかった。また，啓蒙的な活動として，『総力ガイド! これからの経済学 マルクス、ピケティ、その先へ (経済セミナー増刊)』日本評論社刊に，書評コラム：ハイエク『個人主義と経済秩序』を分担執筆した。さらには，名古屋大学水田賞および，経済学史学会研究奨励賞を受賞することができた。

二年目にあたる平成 28 年度においては，「組織」の観点から，二十世紀に自由主義者の会合として西側諸国に影響力を持った「モンペルラン・ソサイエティ」に焦点を当て，ハイエク思想との異同を探ることを目的とした。具体的には，1)かれらモンペルラン・ソサイエティが組

織として展開した言説がいかなる意味で「新しい」自由主義かどうかという問題と，2)かれらの主張と実際に「新自由主義」だとしてみなされ，実行された二十世紀の西側諸国の経済政策が基礎に置く基礎が，どのような関係にあるのか，という問題を考察した。

このような問題設定のもと，当該年度に実行された計画は，自由主義経済思想の伝播に着目し，米国のオーストリア学派の経済学者たちが活動の場を得た大学の図書館を訪問し，かれらにまつわるアーカイブの調査と収集であった。具体的には，ハイエクやフリードマンらのアーカイブを持つスタンフォード大学フーバー研究所，カール・ポパー関係の文書が収録されていると思われるオーストラリア・シドニーのシドニー工科大学，シドニー大学などである。

これらの調査の結果，自由主義経済思想の伝播とモンペルラン・ソサイエティという組織の発展における一定の影響関係と，特に西ドイツにおける経済政策への限定的な関わりが新たに明らかになった。こうした調査は，3 年目以降の研究において，論文・著書への活用が大いに期待できるものとなった。

また，海外のハイエク研究者が編者を務める英語著書へ，論文を寄稿することができた。この論文の掲載は，国内外のハイエク研究者との議論の成果であるだけでなく，このことによって海外の自由主義経済思想研究及びハイエク研究の水準にキャッチアップするという本研究計画の目的の一つが達成されたと考えられる。同時に，残りの計画の実行においても，必要な基礎的研究となった。

三年目にあたる平成 29 年度においては，本研究計画との関わりで新自由主義と「地域」という概念との関係に着目し，新自由主義的な経済政策を採ったチリのピノチェト政権の経済思想とハイエクとの関係を論じ，四年目における新自由主義の大衆化過程について総合的な考察の準備とすることを主眼において考察を深めた。

実際には, 1970 年代に新自由主義的な経済政策によって実際に経済成長を遂げたチリのピノチェト政権の経済思想に焦点を当て，ハイエク思想との異同を抽出した。それは具体的には，他の自由主義者，例えばフリードマンとの比較において，より明確な論点が提出されることになった。このため，計画に掲げたように，ハイエクおよびフリードマンの手紙のやり取りなどが所蔵されているアーカイブスの調査を必要とすることが判明した。そして，そのために，スタンフォード大学フーバー研究所の文書群の調査を企画した。調査には現地の研究者の協力を仰ぎ, 適宜アドバイスをいただく方がより有意義な調査になると思われたが, 先方の予定とど調整が難しかったため，この文書の調査を行う海外出張を次年度に延期し，先にこれまでの調査の結果をまとめて，英語論文の執筆と投稿として成果の獲得を目指すことに計画を修正した。また，国際公共経済学会において，学会報告を行った（吉野裕介「現代のイノベーションとエコシステム」，セッション「変貌する社会経済システム」，組織者：西田亮介，報告者：吉野裕介，西田亮介，橋本理，岩満賢次，国際公共経済学会第 32 回大会，立教大学，2017 年 12 月）。

研究計画の最終年度にあたる平成 30 年度においては，研究計画の主たる内容を，これまでの成果を「総合的考察」としてまとめ，書籍や論文として公表を目指すことと設定した。それまでの三年間の活動により，人物・組織・地域の観点から論文執筆の準備をしてきたが，ここで，各論文で得られた成果を再構成し，「思想の大衆化の過程」に関するまとまった成果として専門的な著作へと結実させると共に，各論の海外学術雑誌への公表を目指した。同時に，ハイエ ク思想の普及を目的に，一般向けの著作でも成果の公開を目指した。

平成 29 年度段階で延期した海外の大学における資料収集を，一年遅れで実行した。それにより，本研究計画に関連する文書群の資料についてはあらかた収集できたと思われる。また，それと前後して，海外出張を延期した代わりに，論文の執筆を先行して行った分の成果も獲得できた。それについては昨年度英語論文として成果公表した通りである。また，成果公表の一つとして，進化経済学会における学会報告（「ハイエクの資本主義観：ケインズとフリードマンの思想および方法論の比較から」，名古屋工業大学，2019 年 3 月）も行い，これまでの研究の到達点をまとめることも行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　　件）

〔学会発表〕（計　2　件）

1. 吉野裕介「ハイエクの資本主義観：ケインズとフリードマンの思想および方法論の比較から」，名古屋工業大学，2019 年 3 月。
2. 吉野裕介「現代のイノベーションとエコシステム」，セッション「変貌する社会経済システム」，組織者：西田亮介，報告者：吉野裕介，西田亮介，橋本理，岩満賢次，国際公共経済学会第 32 回大会，立教大学，2017 年 12 月。

〔図書〕（計　2　件）

1. Yoshino Y. (2017) Beyond Darwinism: Examining the Hayek-Imanishi Dialogues. In: Hayek: A Collaborative Biography. Archival Insights into the Evolution of Economics. Palgrave Macmillan, Cham, 498p.
2. 吉野裕介「書評コラム：ハイエク『個人主義と経済秩序』」『総力ガイド! これからの経済

学 マルクス、ピケティ、その先へ (経済セミナー増刊)』日本評論社刊，2015 年 9 月，156 ページ。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等：https://researchmap.jp/read0132758/
受賞：第 3 回名古屋大学水田賞（2015 年）、第 12 回経済学史学会研究奨励賞（2015 年）

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。